

## 第2回中心市街地活性化勉強会 報告書

日 時 平成21年5月29日(金) 19:30～21:00  
場 所 小田原箱根商工会議所 会員談話室  
内 容 中心市街地商業活性化アドバイザー佐谷氏の進行により進められた。

まず佐谷氏より前回の勉強会において出席者より挙げた項目について、別紙資料に基づきのおり報告がされた。

今回は、新たに参加をいただいた方に「自己紹介」と「どんなまちになりたいか」を発表いただいた後に、①中心市街地の範囲をどう考えるか②三大事業との関係について出席者より意見をいただいた。

### <出席者の意見>

#### ○自己紹介と「どんなまちになりたいか」\*新規出席者のみ

- A =小田原には自然も含めていろいろな素材があるが、あまり話がされていない。素材について活かされているのかについてずっと議論されている。素材は紡いで活かすことが必要。これからどんどん人口が減少していく中で経済的に縮小していくのではなく、新しい商売の仕方、生活の仕方を模索する必要がある。その中で小田原がずっと持っているものは価値・ポテンシャルがあるものと思っている。そういう意味で中心市街地活性化において市民がどこまで本気になってやるのか今が正念場。これまでの皆さんの議論を参考にしつつ新しい小田原の価値、言葉としては「小田原スタイル」というものが出ているが、そういったものを確立していくのではないかと考えている。
- B =小田原は水もおいしい。そして、歴史で有名なものがあるけれど最大限に活かしていない街。一夜城や小田原城など教科書に無料で宣伝をされているのに。ほかの町は何かをやるのに一生懸命にお金をかけるのだから、もっと本物のものを作れば良いのと思う。
- 色々なお祭りをやっているが、何か一本にまとまるものがないものか。何か力強いリーダーシップでまとまるものがないものか。
- 産業も色々な意味で受け入れられると良いのと思う。老舗の方と新しい産業の人同士で対話する機会がなかなか無く、どうしても業界関係者と関わりがちになってしまう。そういった部分での繋がりができれば良い。このエリアが道も含めて突き詰めれば素晴らしい高級住宅街にもなり、素晴らしい人も沢山呼ぶことができる。もう少しリーダーシップあるものを会でできれば良いのではないのか。良い意味でポテンシャルがあると思っている。
- C =小田原は住むには良い。海や箱根が近く、景勝地が豊かにある。しかし、北海道

からのお客様が来た時に、お城以外で案内する場所に悩んでしまった。これが今の小田原の現状なのかと寂しく感じた。だからといってランドマークなどを建てれば良いということではない。

以前ある人の講演を聞いた時に「街をテーマパークとして考えてみよう」というテーマがとても好きだった。商業エリア・官庁のエリア・娯楽施設のエリアなど、エリアごとに分けてそこに応じたものを集中させて投入するというグランドデザインの必要がある。色々なものが乱立しているという評価もいただいている。今から一から立て直すのは難しいとは思いますが、そのテーマパーク論が気に入っていて、エリア分けをして「こういう場合にはここに行けば何でも事が足りる」という街になれば良いのかと思う。

毎週末小田原に行けばイベントやお祭りなど何かやっている・・・そういう街になっても楽しいのではないか。「見て楽しいまち、来て楽しいまち、そして何より住んで楽しいまち」地元の人たちが楽しめなければ、外の人達を楽しませることはできない。

D = 建築的な視点から見れば動きのある街というものは良いと思っている。今後も勉強させてほしい。

E = 城下町の再生以外にこの激しい都市間競争にどう勝ち抜くのか・・・。小田原に戻ってきて、小田原は交通の面から小田原を考えないといけないと思った。

1970年当時は商店街が銀座通りから国際通りの東の方に広がっていくと良い・・・というのが当時の地元の方の考えだったと思う。現実には駅前に集中集積ということになってしまった。

南北を軸として考えた時に、(南の方は本町)北の方の寿町などはどうするのかと思っている。都市イメージがはっきりしていない。駅周辺にもマンションが建ってしまった。城下町を活かそうとするのではなく、食べ物にしているのではないかと思う。

小田原駅を西の極として、東の極を明確に意識したらどうか。山王や小田原 IC など。IC を東の極にしたらどうか。小田原は文化交通として、箱根や湯河原が容易に行けるように環状 IC にしたらどうか。はっきりした意識を持てば、東の方の商店街の活性もあるのだろうか。北の方に住宅を多くさせて、駅の方や商店街に歩いて行けるようにしたらどうか。狭いところでできるだけ歩いて楽しい街にするにはどうしたら良いかを考えていく必要がある。小田原 IC を環状 IC にすると街の拓け方が変わってくるのではなかろうか。若い人が車や電車を使って来たり、住んでくれるように。今はリタイアした人が移り住んでいるが一時的な購買層増加であるのみで長い期間ではない。子供を産む層を増やすよう考えたらどうか。

F = 出演をした FM おだわらの番組内(まちづくり番組)にて「集積」について話をした。集積とは何かその町に特徴というか優先順位でこういうことをやっていこう

となると、それがだんだんと深くなっていくことがある。これが魅力となって行く。

事例としては「富士吉田のうどん」毎週末多くの人が食べにくる。従来は男性的なうどんであったが、これを民家でやったり専門店でやったり色々している。そういう集積があるからいろいろ食べられて楽しいということでGW中は大変な人だった。それを考えると、何が一番ここの街は売りになるのかを考えた方が良い。事例としては長野県の小布施町。栗・花・葛飾北斎をテーマに打ち出し、しっかりとした街づくりを行っている。長野県最小のまちでありながら人が多く訪れるまちになっている。あまり欲張らず、何をしたいか徹底的に掘り下げてみると実は個性が磨かれて小田原らしいね・・・と、そこから小田原のスタイルが生まれてくるのではないかと。「今すぐやること」「長期のビジョン」を両方並行してやっていくことが必要。

### ① 中心市街地の範囲をどう考えるか

佐谷アドバイザーより前回のまとめについて別紙に基づき説明がされた後、今後まちづくりに取り組んでいくにあたってその対象範囲をフォーカスしようと、以前の中心市街地活性化基本計画でだされた170haの範囲を説明した上で、出席者に中心市街地の範囲をどう考えるかについて問うた。出席者からの求めにより、補足として小田原市産業政策課職員より170haの具体的な地域と、旧中心市街地活性化地域の300haの範囲について説明がされた。

E = 小田原の中心市街地においては、以前の300haを範囲とするのが望ましいのではないかと。170haだと単なる商業再開発に見えてしまう。

佐 谷 = 行政的な見方をした時の中心市街地のスタンスの決め方と、この勉強会のなかで中心市街地活性化というのをそこまでのスタンスを広げて話を進めていくか、もう少し例えば絞り込んで・・・などの範囲をここでは問いかけている。

G = イタリアではローマ時代から城郭都市があり、城郭があることによって中心市街地が増えた。現実的な話をするとアーバンストールが進んでしまっていて広範囲に市街地が形成されている。そういったときに中心市街地ということよりももう少し中心・・・。生活の中心・商いの中心というものを今どの辺にあるのかということをついたらどうか。

日本は鉄道に沿って開発するというのが昔からあるけれど、駅を中心に結んでいく。もしくは鴨宮の方にできている中心地というものがあるって、それを小さな線とした時に、どう上手にネットワーク・リンクさせるかを考えて、最終的に全体の大きなものになるのかとといったところではないか。ここで中心市街地という考え方を全くなくして進めてしまうというのはちょっと(良くない)。小田原の全体のビジョンをどう捉えるか・・・ということ考えた上で、掘り下げてどこかに

取り組みましょう～としたら良い。

A =小田原城というのをもう少ししっかり認識した方が良いように思う。小田原城は城郭都市としてとても広範囲なエリアを持っていて、それを考えていく方が良いのか。小田原駅・東海道線路は小田原城のエリアを突っ切っており、文化財保護的にはとんでもないこと。線路部分は掘ってしまっているのが今の状態になってしまっている。そういうことがあるので、(現在分断された)そのエリアで行くのか・・・小田原城や城下町だということを小田原の売りにしていこうとするのであれば、そういう可能性があるのであれば、小田原城というものを今一度しっかりと認識し直す必要があるのではないかと。その時にはじめてどのエリアを現代の中心市街地ということで設定するのか・・・というところで大きなヒントになるのではないかと。この勉強会の中でもどこかで一回小田原城のことについて勉強をする機会を作ったらどうか。(小田原の城と緑を考える会会長の)田代道彌氏が造詣が深く良い。

佐 谷=勉強会を進めていく中で、小田原の場合には小田原城は外せない。それについてもう一度勉強するという事で皆さんの認識をぶつけ合うというのも一つのアイデアではないか。それで一本の方向になるかは不明。その中でどういう捉え方・やりかたをすれば良いかを考えても良いのではないかと。

G =昨日、都市計画課で東大名誉教授の渡辺定夫さんと話をした。山橋市長だったころに教育委員会の方の予算で渡辺定夫さんを筆頭とするグループが小田原城およびその周辺地域の調査をやった。当時ツカダさんという方が教育委員会で、その方のところにまだその資料がある。自分も数年前にそのコピーを拝見した。これには昔、小田原の城郭がどの辺にあったのか、それを現代の小田原の街にプロットした時にどれぐらいまでかかっているのかなど色々なことが記載されている。そういうのを見て勉強するのも一つの手段ではないか。

E =小田原城、それだけで都市間競争に打ち勝てるのか。当時の経済を支えていたのは箱根物産の職人や小田原の材木屋だった。末部を支えた小田原の職人さんは板橋にいた。そういう範囲で考えた方が良いのではないかと。

H =小田原をどういった街にしたいかと考えた場合におのずと範囲が決まってくる。目的によって範囲が決まってくるがいったんにはできないので、どこから始めるかの優先順位をつけてどこからやるか、そういう手順でやっていたら良い。

## ② 三大事業との関係について

佐谷アドバイザーより、小田原市長が挙げる「お城通り再開発」「城下町ホール」「地下街」の三大事業との関係について下記のとおり投げかけがされ、出席者より意見が出された。

佐 谷=まちづくりをしよう。外側から小田原を捉えなおして、どこから手をつけるか？

商売活性だけでもできるのかという論議もしなくてははいけないし、イベント的なこともやらなくてははいけないし、住まいということもやっていかないとはいけない。生活がそこでどういう豊かなものができるかということをやっていくのがまちづくりではないか。そこへ議論を持っていきたいと思っている。その中で小田原城の話の皆でしましよ・・・というのを途中で盛り込みたいと思っている。中心市街地については一気に「ここだ」と規定するものではなくやっぺいこう。ただ、具体的に開発するとか何かを興していこうというのは、この場所を使ってまずはやっぺいしましよということになるのではないかとはいっている。

今、このところで市の基本方針として三大事業(「お城通り」「城下町ホール」「地下街)」について、具体的な場所、取り組まなくてははいけない課題として出された。この三大事業は小田原を活性化する大きな案件であることは確かだが、それについて、それだけの案で良いのかを議論する必要がある。

三大事業については行政が主体でやっぺいいく部分があるが、そういう中でも民間の活用、民間で動いていかなくてははいけない部分も多くなる。そういうものにどういう形でこの街づくりを考えていくのか、そういうものを議題として考えていくのか、あるいはその3つ以外で色々なことを考えていくのか・・・その辺のところを三大事業との関係というところでお考えはあるか。

I = 三の丸地域については中心市街地活性化とは切り離して。お城通り再開には多額の費用がかかり、積極的に手を挙げる事業者もないだろう。現在の駐車場として今は収益が上がっているということなので、先行きを見ながら考えて、期が熟せば議論を進めながら計画を検討するのは良い。地下街については、閉鎖していることと、管理費がかさんでいることが問題なので、すぐにでも開けて市民の利便にするような事業ができるようにすると良い。

A = 三大事業がすべてではないが、大きな要素であることは間違いない。緊急性のあるものはやるべき。個人的意見として、市民ホールについては今すぐとりかかる必要はないが、地下街はまったなしと考える。中心市街地には2つのアプローチがある。①緊急にすぐやるべきこと、②しっかり議論を重ねて大局的な観点で進めるで、全体のなかでランドデザインという言葉が使われるが、エリア全体をどういうコンセプトで作っぺいいくのかその中で何がどこにあるべきか、どういう機能を据えるべきか、もう一度しっかり考えない限りは・・・。

本来であれば三大事業もありえないこと。そうはいっても現実的に課題は沢山ある。まずはランドデザインの議論をどこかでやるべきである。行政では総合計画というものがあるが、それありきではなく、生活ありきの計画である。そういう中でランドデザインを作り上げていくべき。地下街においても誰がやるのかという話になった場合、純粋な商業的なデベロッパーとして入る可能性は非常に低い。市民レベルでできることを考えていかないと、今のままになってしまう。

B = ランドデザインが明確になっていれば協力する人も出てくるし、何かの際に税

金の補助・優遇もあれば協力してくれる。(遺跡調査などがあった時に、地元の人は何千万もの費用がとられることがある)グランドデザインなしに一方向的に依頼をされても協力する人は出ないのではないかな。

佐 谷＝グランドデザインの話は必ず出るが、それがないと何もできないのもどうか。検討委員会においても当初はグランドデザインなしに取り掛かりはできないのではないかな・・・というような話に終始した。両建てで取り組む必要がある。グランドデザインを話し合うチームと具体的にやる案件とのコンセンサスを得られれば良いのでは。地下街においては誰かが手を挙げないといけないがどうか。

F ＝グランドデザインはなくてはならない。迷った時にそこへ戻れるようなフィールドーかもしれない。それが明確であればあるほど、街は間違いなくまとまりやすい。葉山町のようなみんなが協力する偉大なるスモールタウンのような。持続的なサステナブルな目標がきちんとある。走りながら作っていても良い。出てくるのは「歴史に敬意を」「お城を大切に」「緑」「水」というキーワードが出てくるはず。そういうものを無視した開発はこれからできなくなる。もっと地元の人が街の生活文化を楽しむようにしたら良い。そこに来街者が共鳴して来るのではないかな。地域の方にとってメリットがあり記憶に残るものであり、それが来街者にとって好感が持てるものを作っていくのは良いことではないかな。その時に必要なのはきめ細やかさ・ディテール。外の方に照準を当てると大雑把になってしまう。小田原の背景にある歴史や風土を絡めながら新しい生活提案ができれば良い。

佐 谷＝検討委員会で話をした時にもその話がベースとなっていた。地域が持っているものを活かし、結びつけてその人たちの手でやっていく・・・というのがなければ、ほかの街との差別化はできないのでは・・・というような。

F ＝ランニングコスト・オペレーションもしっかり計算しながら、街がどの持続的に成長できるか。その施設だけではなく、そこに関わる、たとえば食べ物を扱うところであれば、原点としてそれを作っている生産者の人たちにとってのメリットは何か。そこから一度考えてみたらどうか。小田原は第一次～第三次産業が揃っている街。そこをやっていけば面白い業態ができるのではないかな。

C ＝小田原地下街については三大事業というのにピンとこない。再開発をする意味があるのか。全部壊して駐車場にしてしまっても良いのではないかなと思うこともあった。小田原地下街はこれだけやっても失敗をしてきたので何もしなくても良いのではないかな。大きな駐車場にすれば喜ばれるのではないかな。

A ＝「駐車場は(駅前に)本当にいるの？」という議論からすべき。グランドデザインの中でどういう駅前にするのかというような。(これには車利用者が減少している

状況もある)中心市街地全体で小田原駅前の機能の役割分担を考えるべき。

現在において、地下街には税金が垂れ流しになってしまっている。地下街は活用すべし。地下街は手法・方法論の問題。方法を考えるべき。もはや「任す」という発想ではない。小田原で商売をする人たちが携わっていかなくてはいけない。方法はどのような形ができるのか。それは株式会社なのか、LLP、LLC、それとも市民の方に一株株主になってもらうのか・・・そういう方法を今までと違った形で考えていかなくてはいけない。開発のコンセプトを論じ、小田原スタイルを売りにすべき。「観光」というのも大きく変えるべきである。

今までの観光は名所・旧跡を訪れることで一度行けば良いと思われてしまう。しかし、目に見えない要素がいろいろある。それをどうやって光輝かせていくかが、これからの観光であるし、素晴らしい小田原の歴史や文化がある地で、小田原市民がどんな素敵な生活をしているのかが売りになる。よって小田原の歴史・文化は外せない。特に小田原城は尚更。小田原のスタイルの生活提案をしていくそれを考えていくことで中心市街地の大きなポイントと思う。地下街がその発信の場になれば面白いのではないか。

- J = 先日山梨の街道沿いを通ったがナショナルチェーンばかりでどこにでもあのような景色だった。他の都市と同じようなものを作ってもしょうがない。利権などもあるかもしれないが、地元の人ができる方が良い。(移動していて)ふと目が覚めた時に「小田原だ」とわかるような街になるように・・・という方向性で良いか。

佐 谷=(乱暴な考え方かもしれないが)地下街も閉めているぐらいならば、実験の場にしても良いのではないか。小田原に関わっている人たちの手で色々なことをやったら皆が生きていくのではないか。前回の時に意見があったが、小田原は様々な業種が15%ずつぐらいで分散をしている。(特徴がない街ともいってしまうが)それだけ色々な業種に関わる人たちが全部揃っているのだから、その人たちの持っているノウハウをどこかに集結して「小田原」というものを作っていくのも良いのではないか。そういった形が小田原スタイルを作るのには身も入ってくるのではないか。

- A = 小学校社会科の副読本に出てくるのは必ず小田原。主要都市でいて全産業が揃っている。

- E = 経営上の採算の問題もあるが駐輪場にしたらどうか。前回の意見でもあったように東京の衛星都市として輝けるように、長年蓄積した文化の中で・・・。  
水戸や川越、佐倉にはそれなりの風格がある。小田原市はそういう風格はどうなっているのか。どうしても小田原にしかない特徴がある。江戸時代の武将は小田原に隠居場を建てることを考えり、明治時代には「御用邸」が来たという。  
そのような地の利をどのようにして、他の都市を超えた風格づくりをしていくの

か。そこにグランドデザインのポイントがあるのではないか。

終戦後、第一回の邦楽大会は小田原で開催がされた(東京でも京都でも開催ができなかった)。小田原はそういう場所。そういう底力がある小田原をどう演出していくか。グランドデザインのバックボーン、焦点を絞ってお城の研究をやっていくべき。1970年代小田原への芸大の学部(短期大学)誘致活動を行ったが達成できなかった。(大学教授の寮などができれば「小田原詣で」が始まり大変な吸引力がおこる)注目される小田原にどうしていくのか。城下町ホールにしても市民サービスのホールではないのではないか。

佐 谷＝小田原の歴史や潜在的な力等をこれから具体化(表現)することをやっていく。文化・歴史が底辺にあり、今の生活がある・・・というのが良いと思う。小田原を思い描いて外から来た人は小田原の奥深さを知ることができずにガッカリして帰ってしまいがち。一方でじっくりと調整をさせていただく必要があるのではないか。

G ＝小田原には人を泊める場所があると良い。東海道線沿線のエリアで駅前にはあんなに空いた土地がある所はない。チャンスと考えるべき。これまで駅周辺には商業ベースで拓けてきたが、ここにきて商業ベースではなく、人の生活を中心とした場所づくりができるのではないか。また、広場ということ考えた時に、人が滞留できる人と人が交わる場所というのが無い。この地下街をぜひそういうような形を目指して、何か作り変えていく。

都市はもの(駐車場、車の流れ)が手を結んでいく・・・というのが重要。地下街ができた時も小田原駅にいる人をどうやってその周辺に逃がしていくのか・・・という手段だった。もう一度、地下街を小田原市民(人)がゆったりと手をつなげる場所にしていくことが重要。

小田原にはひとつ、どうしても足りないものがある。それは都市機能を備えたホテル。歴史的に見れば、帝国ホテルをデザインした人が今の城山中学付近に「小田原ホテル」の建設計画をやったことがあるような、それぐらい魅力のある街だった。よってもう一度、都市生活ができる、そういう機能を持ったホテルを建てることも小田原を考える上で必要ではないか。

「ポケットパーク」というものは小さいものがそうではなく、面が揃ったところに対し奥まったスペース、人の流れに対して滞留できるスペースをいう。そういうことで人と人とが会う場所・・・をいう。

F ＝検討委員会で配布された資料を見ていて、駅周辺で駐車場をやっているところをチェックして駐車台数を調査したが、その台数に驚いた。が、栄町の駐車場が満車になることはない。需要と供給からいってこれ以上駐車場は必要なのか。「人」に優しいのか、「車」に優しいのかはっきりさせ、客観的な数値で捕らえていかないと間違った方向に進まざるをえないのではないか。できたら駐車場は避け



ていきたい。

どのような運営組織にするのかという意見がでたが、小布施町では「ア・ラ・小布施」というまちづくり会社がある。50人×50万円の出資金で始まった。始めの配当金は0円だったが反対者は無かった。それが本当のスタート。そういう気持ちでできるかどうか。他人任せではなく自分たちでやっていかないと。

将来の小田原のために・・・そう思う人が50人いればできるのではないか。

広場については、検討委員会においてお城通りがセットバックして良い広場を作っていた。良い都市は良い広場があって人が集ってくる。都は政(まつりごと)・祭り、市は市(いち)。必ず広場で市が開かれる。

地下街に広場が良いのかというと、自然光が入るほうが良いと思う。お城通りの再開発の場所は広場として使いながら、そこが交流の場所となるようなメッセージの出せるものを作ったらどうかと思う。広場については、アメリカ・オレゴン州のポートランドでは街の真ん中に広場がある(以前そこは駐車場であった)。そこは街のランドマークになっており、街のイベントや市民の憩いの場となっている。なお、そこに使われたレンガにはレンガを寄付した協力者の名前が綴られている。(1人につき20\$)これは一生の宝物になる。そういう広場作りで出資の考え方とか、その方向でこれから小田原がやっていけばステキになるのでは。

先日日経MJで寄稿した「ファーマーズマーケット」はポートランドでは現在では街の新しい観光になっている。新聞社やスーパーマーケットが出資し、農家の方がそこで利益を得れば、それを元に更に良質のものづくりへ投資でき、それがスーパーマーケットで売れる・・・大きな広い考えで仕組みが作られている。そういう業態が小田原にあるのか。今はない。外の方も楽しめる業態は何なのかを考えていきたい。

- E = 小田原北條400年のイベントを今の駅前の駐車場でやったが、小田原北條時代の大手門は北を向いており、青橋近くにあった。江戸時代に入って箱根口に大手門。中期・稲葉氏の時に今の手門のところに移った。そこで当時の山橋市長に大手前広場としての感覚で使用しましょう・無駄な空間にしましょうということでイベントをやった。駐車場も半分を利用できれば大きな広場として利用できる。
- K = 広場という発想は良いと思う。自分自身、小田原再発見をしないといけないという考えを持っている。まち歩き検定も皆勤賞。自分が楽しむことが大事。色々な可能性を見つけながら・・・農業がファッション化しつつあり、小田原もそういう若者がどんどん出てきており、そういった所と一緒に休耕地・田んぼを再興させようといった活動をしている。面白い肥料を作っているリサイクルセンターへ連絡なく行ったにも関わらず、工場見学をさせてもらえた。そういうところの新しい発見。色々な物を取り込みやっていく・・・すごい可能性がある。建築的なものではなくソフト的なものでもっと面白くないか。それが広場があれば良いし、インフォメーションセンターや人を紹介してもらえるような所とかあって、

街が面白くなると良い。

D =小田原は駐車場料金が安い。実は駅前に住みたいとずっと思っていた。若者が駅前に住めて仕事ができると良いと思うが、実際に住むのはなかなか難しい。もっと人が多く住めるようになれば。

K =街中に住んでいると、夜遅くとも歩いて帰宅ができ、海にも近い。散歩をするにしても半径1 km以内に色々なものがあるので楽で面白い。

佐 谷=一回目の勉強会でも出たが(生活がそこで済むような)完結型がとても魅力。小田原を目指すのは結局そちらなのかという気がするのだけれど。(できると良い)

H =錦通りで勉強会をするが、その多くはサラリーマン。その人たちは住みにくく、飲食費も高く、洋服や電気製品が揃わない、住もうとしてアパートを探しても無い、買い物の場所を聞けばロビンソン百貨店を紹介されるといった意見を聞く。住むところではないというイメージがある。今後高齢者が増え車も減少していく。コンパクトシティではないと住みにくい。そんな所に観光客は来ないのではないか。小田原には函館のような朝市のような場所はあまりない(漁港はあれど)。住んでいる人たちが誇りに思えるようなものがないのでは。まちづくりは、住みたいと思うような街・観光客が訪れたいまちづくりが必要。現在、地下街の閉店を知らずに訪れた観光客は一様に落胆をしているのではないか。グランドデザインは大切だが、緊急のものはやるべき。

佐 谷=この勉強会も何か一つの形にしていくのであれば、今やっていくこととして皆さんに反対意見がなければ、地下街や他に挙げたことなどがあれば分科会を作って詰めていけばと思う。歴史・文化の話など小田原の深さを知った。もっと自信をもってその辺を礎にしてやっていく必要があるのでは。そういうことも含めてグランドデザインの話というのもできたら。

L =この勉強会を仲間にももっと伝えたい。できるなら会議所ホームページにこの勉強会の中身(記録)を掲載してほしい。

佐 谷=中身(記録)は名前を伏せて掲載する。

M =まちの人が関わっていて色々なことが動き出しているの、まちなかでみんなやっていく・・・そうすると人に会いに来るのではないか。住んでいる人が何か夢中になってやっている・・・歴史・お城でこだわりのある人や、農業でこだわりを持つ人。そのような人たちと繋がりができてくれば。みんなの顔がわかるのが良いまちではないか

市職員=形にできるものがみんな話合っていければ。何か身になっていくことを願う

つつ、力になれると良い。

佐 谷＝次回は6/12(19:30～)。できれば皆さんにご出席いただきたい。出席できない方はどなたか代理の人の出席を求めたい。また、農業者の方なども。そうすれば今度やろうとする何か具体的なことの形が見えてくる可能性が出てくる。

F ＝中心市街地なので、地下街とか商店街とかだけではなく、歩いて楽しめるような中心市街地にならないといけない。商店街の既存の問題とかも皆さんと一緒に話し合っていかななくてはならないのではないかな。そういう時に、生産者の方と知り合ったりすれば良いコラボレーションが築けるのではないかな。

G ＝中心市街地はお年寄りが住んだ方が良い。それは社会的問題として、若者世代が狭い所に住んでいて、お年寄りが一軒家にいるケース。曾我の方では市街地調整区域化が進んでいて、そうすると都市機能・サービスが軽減されていくということでお年寄りは困っている。逆に車を運転できる若い層にはそういった所を貸して、お年寄りは中心市街地に住むような。そうすれば曾我という土地は広く、曾我では餅つきなどもできるので、子供には天国のようなところ。その様な所は都会の人には魅力的な土地ではないのか。必ずしも中心市街地は中心市街地だけではなく、中心市街地を活用することによって小田原の周辺部を活性化させることもできる。その辺の視点も忘れずにやっていったらどうか

次回第3回勉強会は6月12日(金)19時30分より小田原商工会議所にて開催。

以上

<当日出席者> \*順不同・敬称略

石田一夫 石塚広明 岩瀬照子 小野意雄 久津間裕行 倉田雅史 松本大地 櫻井泰行  
佐藤慎一 鈴木悌介 中戸川洋 平井義人 古川達高